

論文の要旨

論文題目 発達障害児の行動特性を考慮した統合保育環境整備に関する研究

氏名 崔 喜媛

本論は、障害を持つ乳幼児が健常児と一緒に保育を受ける「統合保育」環境を検討し、これからの増加が予想される統合保育を支援する建築についての知見を得ようとするものである。様々な障害のなかでも、主に他者とのコミュニケーションに問題を持つ「発達障害児」を本研究の対象とし、発達障害児の行動特性を把握した上で、発達障害児の行動と空間との関係は何か、社会的相互作用を促すことができる環境とはなんなのかを考察する。

第1章では本研究における時代的・制度的背景、目的、方法、位置付けを述べた。
具体的な研究の課題は下記の通りである。

【課題1】 発達障害児をはじめ、様々な障害種の障害児が、保育園や幼稚園と並行して利用する療育機関である「児童デイサービス」の現状及び空間の使われ方等を把握すること。

【課題2】 「児童デイサービス」をフィールドの対象とし、発達障害児の行動特性を把握すること。

【課題3】 統合保育実施保育園での行動観察調査から、発達障害児と健常児、発達障害児とスタッフとのかかわり方、発達障害児の居場所・行動領域の特性を考察し、空間計画上の方向性を探ること。

第2章では、一般保育園に通う発達障害児が児童デイサービスを並行利用することに着目し、東京都所在の「児童デイサービス」を対象にアンケート調査を行い、療育の場の建築的特性・利用児属性・運営及び利用上の特性などを把握した。

運営主体によって空間構成や療育面からの問題点等が異なるが、特にNPO法人団体や社会福祉法人が運営する場合には、空間の確保が容易ではないため、限られたスペース活用に対する様々な問題点とそれに応じた工夫がされている。一方、利用者属性に関する結果から本研究の趣旨と関連して注目すべきことは、児童デイサービス利用児中、発達障害児が非常に多いことと、一般保育園・幼稚園を並行利用する障害児が多いことである。

第3章では、児童デイサービス2ヶ所を対象に行動観察調査を行い、施設で療育活動の様子を把握することにより、発達障害児を始めとする障害児の行動障害の実態と指導員の療育行動及び児童デイサービス空間の使われ方を考察した。療育において、グループ指導・個別指導・各種訓練などといった各活動毎に空間が設定されていた方が望ましいが、活動に要る空間が備えられていない事業所が多いのが現状であり、限られたスペースを使いこなしている事例を考察しておく必要があるという背景から調査を行った。

第4章では、統合保育実施保育園3ヶ所を対象として行動観察調査及び健常児の中に混ざって保育を受けている障害児の居場所選択・行動領域・他者との関わり方を把握した。保育所における障害児保育は、障害のない幼児の集団の中で数人の障害のある幼児と一緒に保育する形態がほとんどである。統合保育における保育の方式は、障害のない幼児のための保育方法や内容が行われるのが通常であり、そのために障害のある幼児にとってその保育の場は必ずしも十分な保育環境とならない場合もあるという疑問点から調査を行った。調査結果、設定保育場面において健常児と別の場所に滞在する場合もあり、同じ場所に居るとしても他者との関わりがあまり見られない場合もあった。従って、統合保育環境において、他者との関わりを多くし、発達障害児の社会性側面からの発達支援に対する働きかけが求められる。

第5章では、統合保育実施保育園2ヶ所の及び児童デイサービス3ヶ所の療育関係者を対象としてインタビュー調査を行い、統合保育に向けて行った環境整備の実態を把握し、発達障害児のための統合保育環境整備のあり方に関する知恵を得る。

本研究の結論である第6章では、発達障害児の行動特性に基づいた空間上の要求事項、今後増えていく統合保育環境において、「目に見えない障害」に対する支援・援助・整備の必要性を論じ、建築的な方向性を提示する。